

FRN350 フランス文学講読

4年 1,2クォーター

担当教員 松田 和之

授業形態 講義, 演習

アクティブ・ラーニング アクティブ・ラーニング科目

単位数 2

曜日・時限 未定

授業概要

フランスの文学作品を題材に取り上げ、作者に関して解説を加えた上で、作品の冒頭箇所とその主要テーマに関わる箇所を原書で講読する。フランス文学の奥深い魅力に触れながらフランス語の読解力を涵養することが、この授業の目的となる。メリメの短篇小説、ドーズの『最後の授業』、ルナールの『にんじん』、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』、カミュの『異邦人』などをテキストとして取り上げるが、それらの取り扱い方としては、講読対象をそのうちの長篇あるいは中篇作品のいずれか1篇に絞り、15回の授業時間をすべてそれに充てるのか、あるいは短篇作品を中心に複数の作品を取り上げ、それぞれに特徴がよく表れた箇所を読み比べるのか、二通りのやり方が考えられる。年度ごとにいずれかを選択することになるが、その際には、受講生の興味や要望をも考慮しながら判断したい。

また、テキスト講読に加えて、関連する映画やドキュメンタリー映像を鑑賞する時間をも随時設け、作品に対する理解を深める。

到達目標

- (1) 19世紀と20世紀のフランス文学を彩る名作を原書で講読することで、フランス語の読解力を涵養する。
- (2) それぞれに個性的でありながら、いずれも文学史上に確固たる位置を占める名作の数々を、その作者や時代背景を理解しながら精読することで、フランス文学及びフランスの文化や宗教に関する幅広い知識と文学的な感性を養う。

期待される効果

- (1) 文学作品の彫琢された言葉に接することで涵養されたフランス語の読解力を活かして、幅広いジャンルのフランス語の文章が読めるようになる。
- (2) 可能な作品については、テキストの英語訳をも配布する予定である。二言語で作品を読み比べる作業を通じて、フランス語のみならず英語の語学力をも鍛えることができる。
- (3) フランスの文学を中心とする文化や思想、宗教に親しむことで、欧米の文化や思想、宗教に関する基礎的な知識が身につく。

先修科目

「フランス語 I～IV」(共通教育科目)、「フランス言語文化講読」

教科書・参考資料等

- ・特定の教科書を使用する予定はない。配布プリントをテキストに充てる。
- ・参考資料(参考図書・参考映画等)については授業の中で随時紹介する。ここでは、文学史関係の書籍を二点紹介するにとどめたい。
 - (a) 饗庭孝男他編『新版フランス文学史』、白水社、1992年。
 - (b) 柏木隆雄他編『エクリチュールの冒険—新編・フランス文学史—』、大阪大学出版会、2003年。

授業の方法

基本的にテキスト講読の演習形式をとるが、随時、講義的な要素も織り交ぜながら、扱う作品に関する理解を深めてゆきたい。各回の授業で講読するテキスト(プリント)は、遅くともその1週間前の授業時には配布し、予習に充てる時間が確保できるよう配慮する。また、講読する作品に関連する映像資料をも有効に活用したい。

成績評価

受講態度等を考慮した平常点及び学期末のレポート（あるいは筆記試験）やリアクション・ペーパー、提出課題への取り組みに対する評点から、総合的に評価する。

成績

- 40% 平常点
- 20% リアクション・ペーパー、提出課題
- 40% レポート（あるいは筆記試験）

授業スケジュール

第1回：ガイダンス等

まず授業概要や使用テキスト、成績評価等に関する説明を行う。続いて最初にテキストとして取り上げる短篇小説『トレドの真珠』*La Perle de Tolède*(1845)の作者プロスペル・メリメ(1803-1870)の人と作品について概説し、次回以降の講読に備える。

第2回：メリメ『トレドの真珠』① — 短篇小説の手本 —

三島由紀夫が『文章読本』の中で古今東西の短篇小説を代表する一作として取り上げたメリメの『トレドの真珠』を今回から3回にわたって通読する。物語展開のある種独特のスピード感、切り詰められた文章を駆使するメリメ特有の文体のなせる業である。過去時制の使い分けや物語的現在と呼ばれる現在時制の使い方にも注意しながら、読み進めてゆきたい。

第3回：メリメ『トレドの真珠』② — レコンキスタを寓意した小説 —

スペインを舞台とする『トレドの真珠』は、明記はされていないものの、この国がキリスト教圏とイスラム教圏の勢力争いの場となった時代、いわゆるレコンキスタ(国土回復運動)の時代の物語である。主人公の二人の騎士に焦点を当てれば、この小説がキリスト教圏とイスラム教圏の対立を寓意的に描いた作品であることが了解されるだろう。

第4回：メリメ『トレドの真珠』③ — ファム・ファタル(宿命の女)の物語 —

小説のタイトルは、ヒロインの渾名から取られている。二人の誇り高き騎士がともに我が物にしたいと欲した世界の美女「トレドの真珠」に焦点を当てれば、同じ作者の代表作『カルメン』と同様に、周りの男性を破滅へと導く美女、いわゆる「ファム・ファタル」のテーマを扱った作品としてこの小説を読むこともできるだろう。

第5回：ドーデ『最後の授業』① — 普仏戦争とアルザス地方 —

メリメと同様に短篇の名手と称されたアルフォンス・ドーデ(1840-1897)の代表作『最後の授業』*La dernière classe*(1873)の抜粋を今回から4回にわたって精読する。講読に取りかかる前に、物語の時代背景が十分に理解できるよう、普仏戦争の顛末とアルザス地方の立地について解説を加えておきたい。

第6回：ドーデ『最後の授業』② — 子供の目に映った戦争 —

普仏戦争でドイツ(正確にはビスマルク率いるプロイセンとその同盟国)に敗れたフランスは、多額の賠償金とともに領土の一部をドイツに割譲することを余儀なくされた。対象とされたのが、ドイツと国境を接するアルザス・ロレーヌ地方である。その結果、これらの地方では、学校で用いられる言語がフランス語からドイツ語へと切り替えられることになった。小説では、アルザス地方の一小学生の目に映ったフランス語での「最後の授業」の思い出が、後日、大人になった彼によって回想されている。自由間接話法も散見するが、読み進めてゆく際には、話法と動詞の時制に充分注意する必要がある。

第7回：ドーデ『最後の授業』③ — 母語と学校の言語の相違 —

メリメの文体がドライであるとするれば、ドーデのそれはウェットであると言えるだろう。読者の涙腺を巧みに刺激しながら、クライマックスに向けて悲壮感を盛り上げてゆくストーリーテリングの妙を味わいたい。加えて、ドーデが演出した悲壮感がアルザス地方の人々の感情を反映したものであるとは必ずしも言えない点について、彼らの母語(アルザス語)と学校の言語(パリのフランス語)の違いにも言及しながら、慎重に考察を加えてみたい。

第8回：ドーデ『最後の授業』④ — 『最後の授業』が教科書から消えた理由 —

太平洋戦争以前から翻訳を通じて我が国でも親しまれていた『最後の授業』は、戦中、戦後を通じて、国語愛と愛国心を昂揚させるための恰好の教材として用いられてきたが、1980年代以降、教科書からそ

の姿が消えてしまう。こうした変化のきっかけを作った書籍のひとつである田中克彦の『ことばと国家』を参照しながら、この小説の功罪について考えてみたい。

第9回：ルナール『にんじん』① — 「狐」という名前の作家 —

日本では子供向けの小説と見なされがちなジュール・ルナール(1864-1910)の代表作『にんじん』*Poil de Carotte*(1894)の抜粋を今回から4回にわたって精読する。あえて児童文学の範疇には収まりきらない「毒」のあるエピソードを選び、この異色作の多様な側面に触れてみたい。まず「にんじん」の一家の歪な人間関係を把握するべく、小説の巻頭に配された「鶏」を取り上げる。

第10回：ルナール『にんじん』② — 加虐者としての「にんじん」 —

主人公の「にんじん」は、一般に母親から虐げられる同情すべき子供として認識されているが、それが一面的な見方に過ぎないことを、彼が猫を殺すグロテスクな場面が描かれた「猫」を通じて確認してみたい。

第11回：ルナール『にんじん』③ — 鍵穴をのぞく「にんじん」 —

小説の中盤に配された「赤い頬」は、同性愛・少年愛的な物語の性格においても、そこに割かれた紙数の多さにおいても、異色の一篇であると言える。今回はこのエピソードの抜粋を精読し、「にんじん」の隠された欲求、つまり自らを虐げる母親に寄せる近親相姦的な感情がそこから読み取れる点を確認してみたい。

第12回：ルナール『にんじん』④ — carotte (にんじん) 対 calotte (司祭帽) —

『にんじん』の中でもほぼ全篇が天候の描写に充てられた「嵐にざわめく木々」は「赤い頬」とは別の意味で異色の一篇であると言える。今回はこのエピソードを取り上げ、嵐の母体がカトリック教会の権威の象徴にほかならない「司祭帽(calotte)」に譬えられている点に留意しながら、巧緻な自然描写の裏に隠された寓意性を読み解いてみたい。

第13回：サン＝テグジュペリ『星の王子さま』① — 象を呑み込んだ大蛇 —

聖書とマルクスの『資本論』に次ぐ世界第3位のベストセラーとされるアントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ(1900-1944)の小説『星の王子さま』*Le Petit Prince*(1943)からいくつかの場面を抜粋し、今回から3回にわたって精読する。まず取り上げるのは、小説の冒頭で語り手の飛行士の子供時代のエピソードを通じて子供と大人の物の見方の違いが説かれる場面である。作者自身の手になる印象的なイラストにも注目したい。

第14回：サン＝テグジュペリ『星の王子さま』② — 王子と狐の出会い —

小説の核心部と言ってもよい第21章を取り上げ、動詞《apprivoiser》や複数形で用いられた名詞《rites》に独自の意味合いが付与されている点に留意しながら、王子と狐の間で交わされる含蓄に富んだ会話にこめられた作者の思いを読み解いてみたい。

第15回：サン＝テグジュペリ『星の王子さま』③ — 「大切なものは目に見えない」 —

狐が王子に人生の秘訣を授ける場面を熟読し、「大切なものは目に見えない」という人口に膾炙する名言の真意を見定めたい。岩波書店が独占的に所有していた翻訳出版権が切れた2005年以降、数多くの新訳が矢継ぎ早に出版された。草分け的な存在であった内藤濯訳も含めて、複数の翻訳の比較をも随時交えることで、講読をより充実したものにした。

※ 授業概要でも述べたように、このスケジュールはあくまでも一例に過ぎず、年度によってテキストの選定が、部分的に、あるいは全面的に変わる場合がある。

事前・事後学習

- (1) 事前学習 (予習) : 上述したように、配布プリントをテキストとして用いるが、毎回、次の回に講読する箇所を指示するので、受講生は、事前に辞書を引きながら当該箇所を通読し、その大体の意味を理解した上で授業に臨んで欲しい。
- (2) 事後学習 (復習) : テキスト中の授業で講読した箇所をもう一度読み直し、文法事項等を再度確認しておく必要がある。また、授業時にとったノートを基に、教員の口頭説明やパワーポイント等から得られた知識を整理しながらテキストの理解を深める作業も怠ってはならない。